

八月のテーマ

万人幸福の葉



え・城谷俊也

大決断の拠り所

経

営者は日々多くの決断を迫られます。その積み重ねが

事業の成果につながっていきます。

経営上の決断は、数値や事実の

蒐集にはじまり、それらの整理、

解釈、さらに自他の経験知を加味

して行なわれるものでしょう。

ただし、いくらデータを蒐集し、

優秀な頭脳集団を抱え、経験豊かな

識者を総動員して判断材料を揃

えても、最終的な断を下すのはト

ップをおいて他にありません。そ

の際に問われることは、右にする

か左にするかの根本的な価値基準、

判断基準を当の経営者が持つてい

るかどうかということです。

倫理法人会では、その拠り所、

決断の指針として、純粹倫理に基

づいた物の見方、考え方を提供し

ています。この生活法則をまとめ

た書物こそ『万人幸福の葉』（以下

『葉』）に他なりません。

ある社長は、『葉』の六条にある

「子は親の心を実演する名優であ

る」という箇所を読んでハツとし

ました。子を社員、親を社長と置

き換えて見たからです。社員ばか

りを責めていた態度を改め、自身の生活や言動を改善したところ、はからずも社員との関係が円滑になったのです。

この事例で重要なのは「ハツと

した」という点にあります。情報

として純粹倫理の内容を受け取っ

ても、自らを行動へと突き動かす

ような閃きが去来するか否かは、

その人の感性によらざるを得ませ

ん。実は、純粹倫理の学びで最も

重視するのは、この感覚なのです。

ただし、こうした直観も、まず

は知的な情報として獲得されなけ

れば、閃きようがありません。講

話などで知識として蓄積された純

粋倫理の情報は、実践を通して生

きる知恵と化し、より精度の高い

気づきをもたらすことでしょう。

ここに至ってはじめて、生活法則

としての純粹倫理は、経営上の決

断の拠り所になるのです。

『葉』の著者である丸山敏雄は、

この本の発刊式の挨拶で、「十七の

標語は口をついて出るように記憶

して欲しい」と語り、ここから深

い道に入ることができるといった

ことを述べたといえます。読者が先入観を捨て、現状に照らし合わせて、自らの実践と結びつけた読み方をする時、そこに込められた「叡智の扉」は開きます。求めの強さ、心の純度に応じて、その扉の開閉度合いは変わるので。

「葉」という語は、一説による

と「枝折しお」から転じた言葉だとい

います。迷いやすい山道などで、

木の枝を折ったり、細く削ったり

して、後続の人や帰路の道標とし

たことから、案内や手引きを意味

します。

この小冊子を経営上の指針とす

るには、まず親しむことです。い

つも持ち歩き、折に触れて繙くこ

とを習慣化してみましよう。

または、毎日気に入った箇所を

音読することもできます。不思議

とその時の自分自身に必要なびつ

たりのフレーズに気づく（出合あ）

瞬間があります。それをそのまま

実行に移してみるのです。

『葉』を自律的に活用する時、

物言わぬ文字が語りかけ、大決断の拠り所となってくれます。